ぼいす

北区飛鳥山博物館だより
2006.3.20
16

春期企画展

Skyview【風の視線】—空撮でみる郷土の景観—

会期：3月15日（水）～5月7日（日）午前10時～午後5時
〔休館日〕毎週月曜、3月22日（水）、5月2日（火）

会場：特別展示室およびホワイエ　観覧無料

空から俯瞰したわが街、川、海、山、畑・・・
美しい景観。
気分は高度1000フィート、
魅力発見のスカイトリップ！（空旅）

Skyview【風の視線】 —空撮でみる郷土の景観—

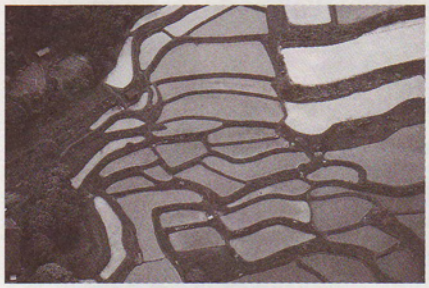
地上1000フィート（300m）の高度からあたかも鳥になったような気持ちで地上を眺めてみると、何がどのように目に映ってくるでしょうか。このたびかつて北区赤羽北に20年間居住し独自の空撮表現で作品を発表してきた写真家・豊高隆三氏撮影による北区・東京都内および関東近県における都市や自然あるいは文化的景観を主題とした60点ほどの作品を展示します。

春は草萌え桜舞う園地や田園を巡り、夏は潮風に誘われて砕け散る波濤や島嶼を旋回し、秋は紅黄に色づく樹叢をもとめて凛空を彷徨い、冬は凍てつく池沼や海岸を探索する。四季折々に変化を見せる自然の景観やさまざまな人間の営みの軌跡をもとめて、写真家は愛機を駆って空に上ります。

今回の展示では、1万点にも及ぶ氏の膨大な作品群の中から、利用者の皆さんが比較的身近に感じていると思われる被写体の写真を抽出し、構成させていただきました。地上写真とは異なる視角から撮られた空撮作品を通して郷土の景観を新たに見直し、魅力を再発見していただけたらと思います。

特に本企画のために新規に撮り下ろしていただいた作家の「心のふるさと」北区の作品が数多く出品されますので、北区に愛着のある方や空撮・写真に関心のある方々など大勢のご来場をお待ちしています。

春爛漫の飛鳥山で風の視線をあなたも感じてみませんか。


上空から見る美しい棚田の風景

企画展関連イベントのご案内

聴講無料

■記念講演会

①演題:「記録としての写真—ふるさとを見る読む」

日時:3月26日（日）午後2時～4時　会場:当館講堂
講師:地理学者（日本地理学会会員）石井　實氏
内容:地理写真の第一人者より映像資料の記録性について講義形式で分かりやすく解説していただきます。
定員:80名（抽選）

②演題:「地上1000フィート・空撮の魅力」

日時:5月3日（祝・水）午後2時～4時　会場:当館講堂
講師:写真家（日本写真家協会会員）豊高　隆三氏
内容:空撮の専門家で本展の作家である氏より空撮の実際についてトーク形式で楽しく語っていただきます。
定員:80名（抽選）

申込:①②とも別々に往復はがきで、
①は3月16日（木）、②は4月24日（月）（必着）まで。

■ギャラリートーク

日時:4月2日（日）・16日（日）・30日（日）
いずれも午後2時から1時間
内容:会場で担当学芸員が対話形式で内容を解説します。
定員:各回とも30名程度
申込:先着順、当日直接会場へ。

新着資料紹介

灯火管制時の電球と電灯笠

今回紹介するのは、浮間在住の梶原利夫氏にご寄贈いただいた資料である。戦時中の空襲に備えた灯火管制時に使用されたもので、電球はガラスが青く塗られており、笠2点は光が漏れないように厚紙でできている。他の一点は、笠の下に黒紙でつくられたジャバラの覆いがついているものである。興味深いのは茶色の笠の側面に張ってあるラベルだ。「凝らせよ照明　漏らすな燈火」という防空標語の次に、灯火管制の時間表が示されている。そして、たとえば11月16日から同月30日までは午後4時30分～午前6時20分、などと半月ごとに日の入り・日の出を考慮した時間指定の細かさにおどろかされる。まさに歴史が刻まれた博物館資料である。

（F）

大地・水・人

花はどこにいった…

久保埜企美子（当館学芸員）

毎年春になると、飛鳥山の全山に桜が咲き誇り、賑やかなハレの空間となる。享保年間、花見の遊園として開発された飛鳥山が約300年もの間、その姿を保ち続けていることは驚嘆すべきことであろう。

もっとも、今でこそ飛鳥山ばかりが花の名所としてもてはやされるが、昨春の企画展「江戸のリッチモンド　あこがれの王子・飛鳥山展」でも紹介したように、もともと江戸東京近郊農村であった北区は緑に包まれた「グリーン・ゾーン」であり、都市居住者にとっては身近なレクリエーションの地であった。

では、桜以外に、どのような花や緑がかつて地域を彩っていたのだろう。まず、桜に劣らず有名なのは滝野川の紅葉である。滝野川の紅葉は金剛寺（紅葉寺）の僧が寛永7年（1630）に植え始めたものと伝えられるが、名所として知られたのは江戸後期になってからである。紅葉が美しく色づくためには昼夜の気温差が激しいこと、適度に湿気を含んだ空気などが必要であるが、石神井川の深い谷はまさにその条件を備えていた。ちなみに、明治中頃、滝野川の紅葉に関してある美談が紹介されている。それは維新の頃、羽鳥了甫という風流人が滝野川の茶店で休んでいたところ、楓を含め周辺の樹木が伐採される様子にいたたまれず、すぐさま私財を投じて土地を譲り受け、この地の木々を保存したというものである。人による破壊から人によって救われた滝野川の紅葉であったが、昭和33年（1958）の狩野川台風をきっかけとする護岸工事によって、その渓谷美は一切失われてしまった。

規模は小さくなるが、西ヶ原に牡丹屋敷があったことも知られている。西ヶ原は植木屋が多くあった染井・巣鴨地域と隣接する地域であり、牡丹屋敷も植木屋仁兵衛の私邸である。同地で古くから数百品もの牡丹を作り、多いときは8～900本、少ないときでも600本に及んだという。見物人も多かったというが、天保年間には武家屋敷となり、姿を消した。南面が傾斜地で日当たりと水はけが良く、眺望にすぐれた同地は、奇しくも現在バラで有名な旧古河庭園となっている。

河川沿いに目を移せば、桜草の存在を忘れるわけにはいかない。旧荒川沿岸は頻繁におこる水害によって肥沃な泥が堆積しており、また同じく河川沿いに自生する萱が夏の日除けとなって桜草の群生を助けていた。江戸後期から野新田（現在の足立区新田）や尾久、戸田などが桜草の名所として知られており、浮間の名が名所に加わったのは明治中期以降のことである。これには赤羽駅の開業を含め交通の便が確保されたことが大きく影響している。皮肉なことに桜草人気が災いして、戸田や野新田では明治40年頃に乱獲の影響が深刻になっていたが、浮間は大正中頃まで「丁度毛氈でも敷いたようである」（田山花袋『東京近郊一日の行楽』）と表現されるほど、衰えつつも自生地の姿を保っていた。しかし、乱獲に加え、荒川の河川改修による環境変化、そして関東大震災後に自生地のアラキダ土が壁土用に大量採取されたことなどが衰えた桜草に追い討ちをかけた。昭和になると桜草は姿を消し、浮間の河川沿いには桜草に替わって工場が次々と進出した。現在、毎年4月中旬から下旬にかけて浮間公園内の桜草圃場が一般公開されているものの、かつての「桜草の毛氈」を想像することは難しい。

都市化や開発によって得たものも大きいが、失われたものへの思いを消し去ることは決して容易ではない。つまり、失われた花や緑も土地に埋もれた記憶の一部なのである。その記憶を現代の環境のなかに再生する努力が、すでに各地で実践されている。

さて数十年後、この地域に花の香りは漂っているのだろうか。

「東京名所花競　王子芍薬」
明治23年 安達吟光

あるく・みる・きくスペシャル

石神井川を旅する

〈北区編〉

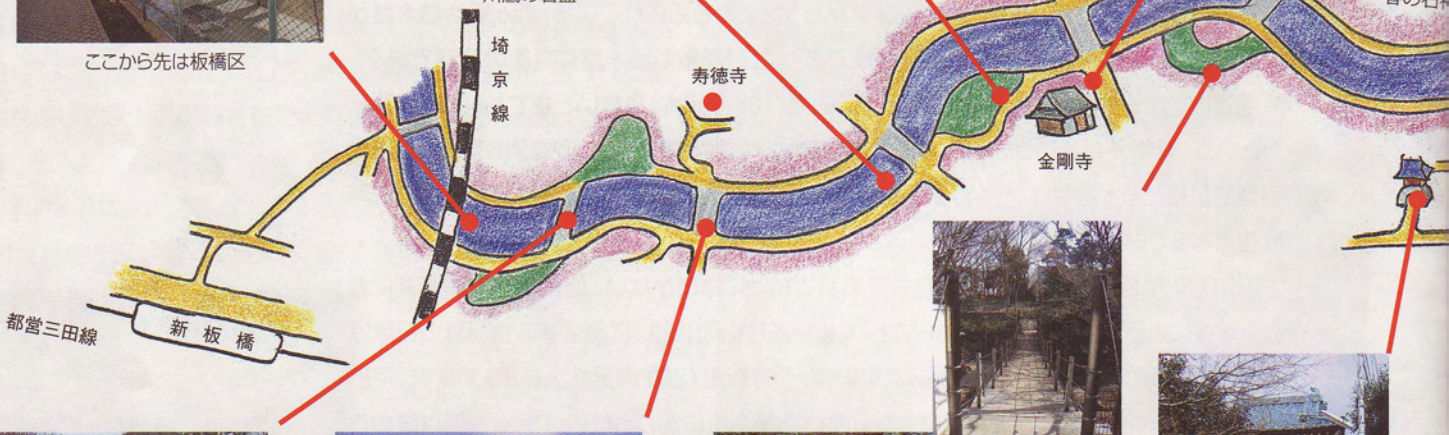
遠く武蔵野の西に源を発する石神井川。延々と東へ流れる川は、時に大きく曲がりくねり、時に台地を刻んで渓谷の様をかもしだし、静かに隅田川に流れ出ています。さまざまな表情をみせる石神井川には数々の鳥が集まり、水面に目をやれば魚が泳ぎ、沿道には季節を彩る花が咲きほこります。また、川の周辺には寺社など古を偲ばせる見どころも多く、ふと時を忘れてしまいます。そんな自然や歴史にふれあいながら、発見の旅、出会いの旅に石神井川を歩いてみてはいかがですか。

門をくぐるとユニークな石像がおでむかえ

その昔松橋弁天があった辺り

川底の岩盤

ここから先は板橋区

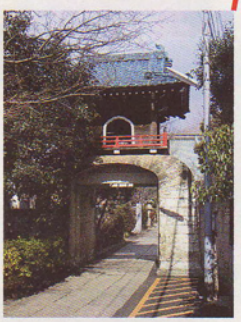


ゆさゆさゆれる緑のつり橋

両岸の公園を結ぶ谷津橋

擬宝珠の並ぶ観音橋

地層の観察ができます

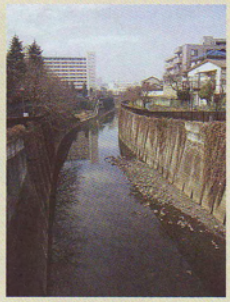


竜宮城のような正受院の門

石神井川メモ

小平市から東へ西東京市・練馬区・板橋区・北区を縫うように隅田川まで流れる、総延長25.2kmの一級河川です。水源はかつて小平市の鈴木小学校辺りにあり、現在は小金井カントリークラブの中にあります。流域周辺の下水道の整備などで水質はかなり改善されており、水質を表す指標の一つであるBOD（生物化学的酸素要求量）も基準値を超えてはいません。

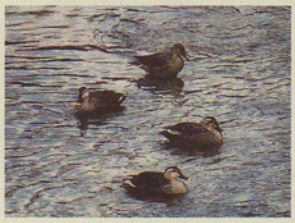
BOD（生物化学的酸素要求量）
水中の汚濁物質が微生物によって酸化分解される際に必要とされる酸素量を表したもの。値が高い場合は水中に有機物が多く、水質が悪いことを示しています。



大地を刻んで流れる石神井川

石神井川で見られる鳥と魚

スズメやカラスはもちろんのこと、ムクドリやヒヨドリ、ハクセキレイ、オナガ、シジュウカラが一年を通して見られます。初夏にはツバメが飛び交い、冬にはマガモやカルガモ、オシドリが水面を行き来しています。また、河口付近ではユリカモメが空を舞っています。川の中にはコイ・フナ・オイカワ・モツゴが泳ぎ、カメやカニもいるようです。コイの中には錦鯉も見られますが、大雨の時に上流の池から流れてきて、そのまま居ついたようです。



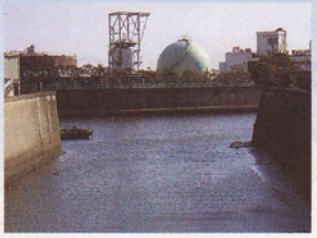
水面に浮かぶカルガモ達

音無橋の下、手をたたいてみると
何やら音が…

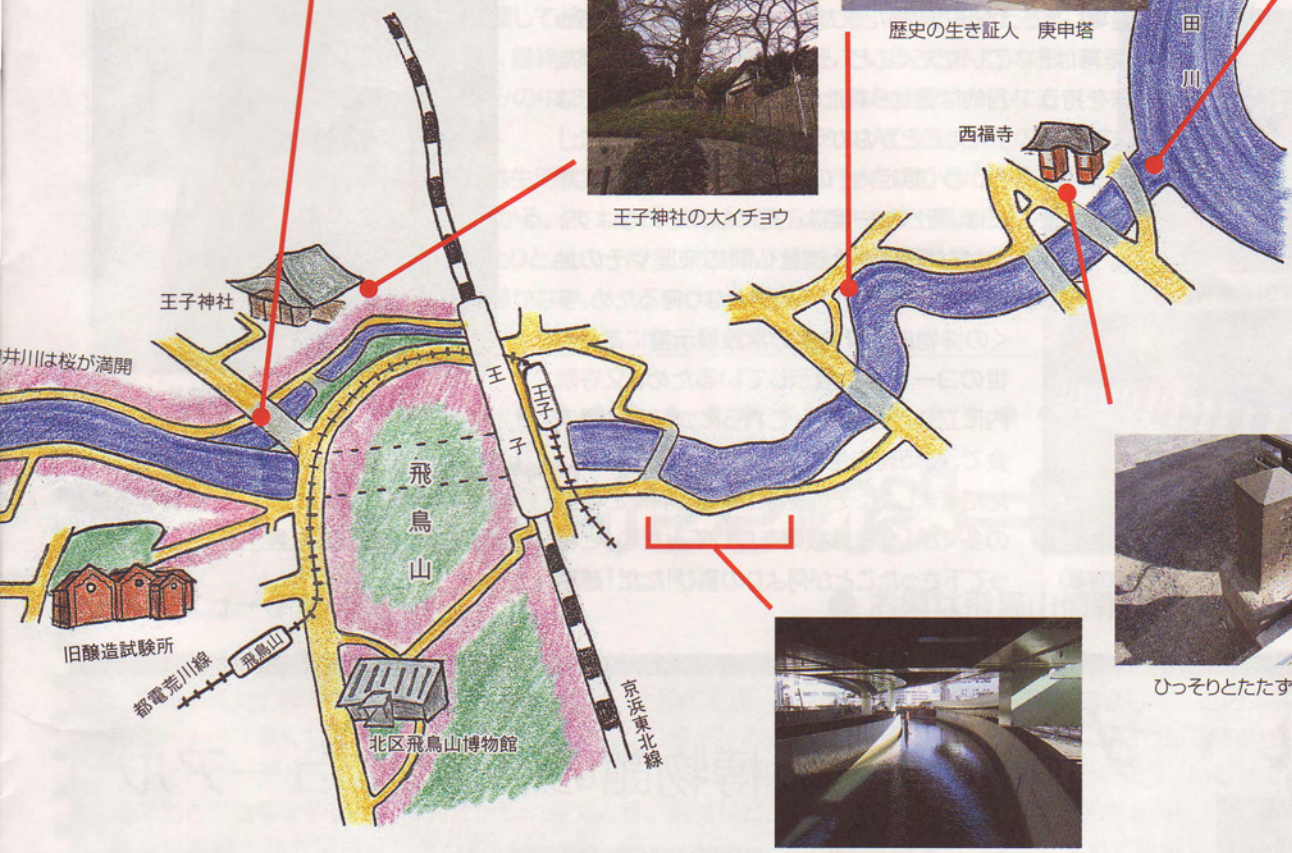
親水公園となった旧河道

王子神社の大イチョウ

歴史の生き証人　庚申塔



石神井川の終着点



ひっそりとたたずむ馬頭観音

王子高速道でフタをされたような
石神井川

写真に見るあの日あの時

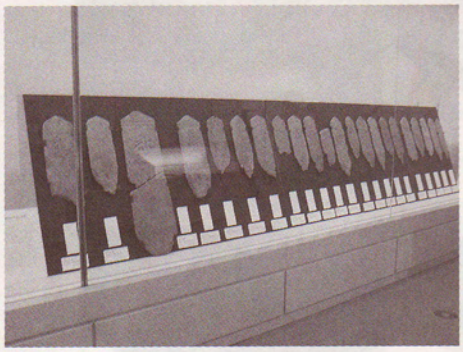
147年前の風景。北区最古の写真はステレオ写真だった・・・。

北区の風景を写した写真で、一番古いものといったらこの一枚。王子の料理屋を撮影したステレオ写真です。時は幕末、江戸幕府が諸外国と通商関係を開始すると、当時最新のさまざまなテクノロジーが日本にもたらされました。写真技術もそのひとつで、迫真の再現性は江戸の人々を驚かせましたが、この王子の写真は、安政6年（1859）7月、横浜開港直後に来日したロシェ（Pierre Joseph Rossier）によって、おそらく同年中に撮影されたものと考えられています。写真家・ロシェはスイスの出身で、ネグレッティ&ザンブラ社の特派員でした。この会社は、ロンドンに本拠をおくステレオカメラ（立体視写真機）製造会社で、同時にヨーロッパ、エジプトにカメラマンを派遣し、各地の組写真を撮影、販売していました。王子の料理屋を撮影した写真も、開国後の日本への関心の高まりからステレオカメラで撮影されたもので、ビュワーを通して立体画像が楽しめました。これまで錦絵によって描かれていた王子の名亭、扇屋・海老屋が、よりリアルに写されています。こうして日本のリッチモンドと呼ばれた江戸近郊の名所、王子のエキゾチックな姿は、写真を通して、広く外国にまで知られていったのでした。（I）

企画展「北区の板碑ー石が語る歴史」発、“感動”？を貴方に・・・

★突如現れた5mの懸垂幕。しかしてその正体は…？

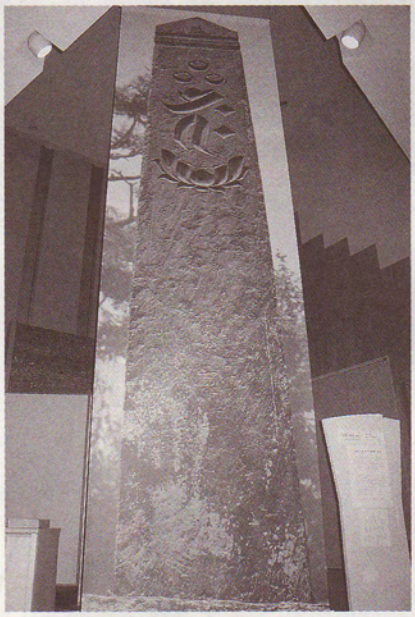
平成17年10月22日、突如として現れたおよそ5mの懸垂幕。何だろう?…そう思って特別展示室前に導かれたお客様多数。実はこの日から開催された秋期企画展「北区の板碑ー石が語る歴史」の導入として登場した長瀞町に所在する板碑の原寸大懸垂幕は、板碑を知らないお客様にいかに興味を持っていただくか、また、「板碑」＝「地味で小さな板状の石」＝「難しくて解らないもの」という固定化されたイメージをどう変えるのか…という課題を克服するべく登場し、活躍したのです。



田端から一括して出土した板碑がズラリ（東博蔵）

★未知なる資料?との出会いと感動

“板碑が地域の歴史を裏付ける貴重な資料だと知っていただくこと”と“中世の人々が石に込めた永劫供養への祈りを感じ取っていただくこと”という「板碑」を取り上げた目的は達せられたのか?回収アンケートでは「見たことがなかったが、興味を惹かれた」という「想定内」のご意見多数。しかし実際には、皆さん一度はご覧になっているはず。なぜなら板碑は、神社仏閣の来歴やその地域の歴史を裏付ける資料となり得るため、多くの博物館や資料館の常設展示室にある中世のコーナーに展示しているため。又寺院内に立つことも多く、これらについては講演会で、諸岡勝先生にスライドで広くご紹介いただきました。その結果、来館されたお客様の多くが「今後は板碑を探してみたい」と言って下さったことが何よりの喜び!ただ「感動した」との意見が多かったのは「想定外」。未知なる?資料との出会いを提供することの大切さを再認識した展示会でした。（洋）



巨大板碑が皆様をお出迎え

ぼいす　博物館の展示リニューアル

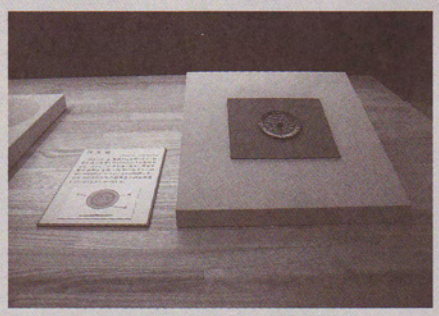
博物館にとって常設展示は顔のようなもの。当館であれば“北区の歴史や自然”といったように、一般的に常設展示はその博物館のメインテーマを展示しているからである。いつでもそこにいけば見ることができる展示。それが常設展示。しかし、いつでも同じものを展示しているということは、一度見たら二度目は足が遠のくということでもある。（それ故に特別展や催し物の開催といった他の博物館活動に力点をおき、リピーターの増加に努めているのだが。）

入館者数（当館では常設展示室入室者数）の減少はある意味、常設という性格からきているということも一因であろう。それでは、常設展示室をリニューアルしよう。とはいっても財政事情もある。北区の歴史が大きく変わったということでもない。ならば、大きな幹を変えずに枝のところを少し工夫してみよう。オープンからの年月の間に、新たな資料の発見や研究の進展もあれば、新しい展示技法の開発もある。少しずつでもマイナーチェンジを行って、動きのある常設展示を目指したいものである。

実は2002年にちょっとだけ展示替えを行ったことがある。田端不動坂遺跡から出土した鏡を一面、展示に加えた。大きな展示替えではなかったが、当館でのプレリニューアルともいえよう。

北区飛鳥山博物館は今年の3月27日で満8年となり、あと2年で節目の10年を迎えることとなる。博物館の顔である常設展示室もそろそろ表情を変えてもよい時期にきているのではないだろうか。

（直）



速報的展示を行った「珠文鏡」

一片の土器から —飛鳥山遺跡出土の北陸系土器—

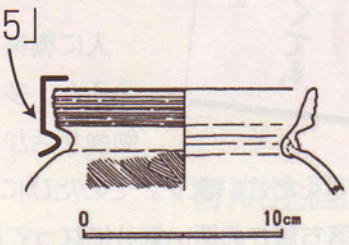
平成6年、飛鳥山公園の博物館建設ゾーンの発掘調査により、弥生時代の集落跡がみつかった。そのときの出土品のひとつが写真に挙げた土器片だ。

この土器片はわずか5cm四方ほどの大きさしかない。この土器を復元するとおよそ13cmほどの口径の「甕形土器」といって煮炊きに使う土器になる。その口の部分（口縁部）にあたる破片だ。土器が破損して捨てられたのか、さらに小さく割れて、最終的に使い終わった竪穴式住居址の窪みの中に落ち着き、そこに埋没した。

この土器はその形の特徴から、弥生時代の終わりごろにつくられたことがわかる。弥生時代は乗馬の風習がまだなかったりと、とにかく遠隔地の通信があまり行き届かない時代であった。その結果、日本列島の各地で固有な文化が発達し、土器もそれぞれの地方で違った形のものが作られていた。だから、ある地域の土器が遠隔地の遺跡で発見されると、専門家は地元の土器とは異なる見慣れない土器にとまどうことになる。

この土器の口縁部は関東地方には無いちょっと変わった形をしている。それは、実測図でみると分るのだが、横からみるとちょうど「5」の字の形をしている。このような形の甕形土器は、実は北陸地方でさかんに造られたものだ。北陸の人がこちらにきたのか、関東の人が向こうに行ったのかはわからないが、ともかくこんな小さな土器からも、ダイナミックな人の動きが読み取れるのである。

（F）



飛鳥山遺跡S103出土の北陸系土器

博物館インフォメーション

● リニューアル情報!

■常設展示がちょこっとリニューアル

今まで縄文土器の移り変わりを展示していた“土器の変遷”のコーナーを狭くして、そこに新たに“縄文ムラの様子”のコーナーの一部として西ヶ原貝塚出土資料を展示します。貝層の剥ぎ取り標本や都内では大変珍しい縄文人骨、貝輪など、貴重な資料が初お目見え。乞うご期待！また、この展示のため土器の展示が少なくなってしまうとお嘆きの方。ご安心ください。残りのスペースで、季節替わりに縄文土器を特集展示します。重ねて乞うご期待!!

みなさんにお目にかかるのをお待ちしてます

■閲覧コーナーの検索システムもリニューアル

3階閲覧コーナーの検索システムを4月から一新します。新システムでは、固定したコンテンツ中心ではなく、データベースの充実と資料の検索機能のパワーアップを目指しています。もちろん、人気のオリジナル・クイズもモデル・チェンジ！閲覧コーナーにお寄りの際は、ぜひご利用ください。

※リニューアル工事のため、3月17日（金）から4月9日（日）まで検索システムは使用できません。

● お得な飛鳥山情報!

ここ数年、柵で囲われていた当館正面の園地ですが、昨年ようやく広場として開放されました！ このエリアは北区に移管された昭和40年当時、「桜の園」として整備された区画でもあり、今も桜の木が立ち並んでいます。あわせて隣接する旧渋沢庭園も公開され、庭園内に残る古墳（飛鳥山1号墳）の見学も含めて散策することができます（旧渋沢庭園は夕方に閉門）。お花見にも絶好のエリアですので、場所取りを狙っている方はお早めに!

小さなお子様向け遊具もあります

●「北区飛鳥山博物館のあり方」報告書の公開

当館では平成16年度から17年度にかけて、これからの方向性を改めて検討し、その成果を「北区飛鳥山博物館のあり方」報告書としてまとめました。報告書は3階閲覧コーナーおよび当館HPにてご覧いただけます。より良い博物館づくりを進めるため、皆さまのご意見をお待ちしております。

●北区の昔を伝えるモノや写真を探しています!

博物館では区内で使われていた生活用具や北区に関係する古い文書、また昔の町並みや人々の暮らしぶりがうかがえる写真などを探しています。処分してしまう前に、どうか一言お声かけください!
ご連絡は03-3916-1133、担当クボノまで。

知性派を気取りたくても肉体派

学芸員リレーエッセイ

博物館いろは歌留多

人に職業を問われて「博物館の学芸員です」と答えると、多くの方は「静かなところで」「好きなお勉強が活かせて」「すてきなお仕事ねえ」などと言ってくださいます。そのたびに、口では御礼を述べつつも、実はなんとも落ち着きの悪い気分になってしまいます。

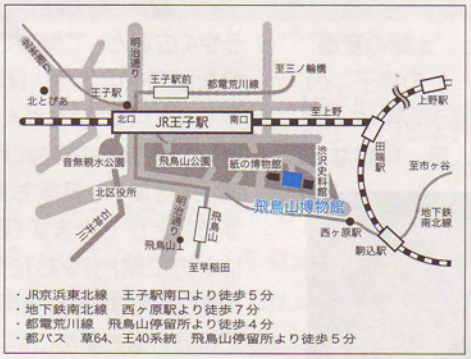
確かに学芸員（しばしば「雑芸員」とも揶揄されますが）は本来、資料の調査・研究を土台に展示や普及などの博物館活動をおこなう職業ですが、実際の職場で調査研究に取り組む時間は（少なくとも私の場合）ほんのわずか。もちろん、イメージ通り学芸員が研究に没頭できる博物館もあるとは思いますが、当館のような地域博物館では頭よりも身体を酷使することが多いのが現状です。

「古いモノがあるよ」と声がかかればホコリにまみれて荷を運び、展示となれば重いケースや資料を動かし、見学会では大声で話し続けながら何キロも歩き、体験学習があればマキを割り…と、他の多くの職業と同様、日々の仕事に必要なのは、一にも二にも「体力」！

博物館活動を活発におこなうために、学芸員は「足腰丈夫」で「力持ち」の肉体派に越したことは無いかも知れません。（企）

利用のご案内

【開館時間】
午前10時～午後5時
（有料の展示室への入場は午後4時30分まで）
【休館日】
毎週月曜日（国民の休日・振替休日の場合は開館）
年末年始（12月28日～1月4日）
国民の休日および振替休日の翌日（土曜・日曜日の場合は開館）
このほかに臨時休館日があります。



【常設展観覧料】

	個　人	団　体	三館共通券
一　般	300円	240円	720円
小·中·高	100円	80円	240円

・小学生未満は無料
・団体扱いは20名以上
・三館共通券は当館のほか、渋沢史料館、紙の博物館をご覧になれます。

平成１８年度上半期の主な催し物

春　4～6月

●春期企画展「Skyview【風の視線】ー空撮で見る郷土の景観ー」（3月15日～5月7日）
●講座「風俗画報にみる100年前の北区」（4月22日）
●体験講座「年中行事<端午>を知る講座」（4月23日）
●講座「新緑の日光御成道をたどり歴史を探る!」（4月29日）
●講座「快読!『江戸名所図会』」（5月20·27日　全2回）
●スポット展示「ASUKAYAMAセレクション5☆2006」（5月20日～6月25日）
●講座「新聞から読む考古学　パート1」（5月28日）
●講座「初級考古学講座　ムーンライト編」（6月1·8·15·24日）
●講座「初級考古学講座　サタデー編」（6月3·10·17·24日）
●16mm映画会「都電の在りし日」（6月11日）

夏　7月～9月

●講座「ムーンライト·ミュージアムトーク」（7月14日）
●イベント「夏休みわくわくミュージアム☆2006」（7月21日～8月31日）
●16mm映画会&トーク「台風·水害の歴史を探る」（9月3日）
●特別展覧会「第5回　奥山峰石と北区の工芸作家展」（9月9日～10月9日）
●講座「新聞から読む考古学　パート2」（9月10日）

*催し物名は仮称です。
詳しくは館発行の「催し物案内」、北区HPをごらんください。

お知らせ

□ 燻蒸による臨時休館

収蔵資料を害虫やカビから守る燻蒸消毒にともない、6月27日(火)から同月30日(金)までを臨時休館とさせていただきます。何卒ご理解のほどお願いいたします。

編集後記

寒い冬が過ぎ、また飛鳥山に桜の季節がやってきました。今年は博物館正面の広場が開放され、お花見時は一段と賑やかさが増しそうです。お蔭様で、春は入場者も増えますが、その目的はトイレ利用だったり、館のソファで休むためだったり…。とはいえ、ついでに企画展や常設展を見て、北区の歴史·文化の深さを感じてくださる方も多いようです。最初は「たまたま」でも、次は当館をめざして飛鳥山に来ていただけるように、今年も励んでいきたいと思っています!

北区飛鳥山博物館だより
ぼいす　16
発　行　平成18年3月20日
編　集　北区飛鳥山博物館
〒114−0002 東京都北区王子1−1−3
TEL. 03-3916-1133
発　行　東京都北区教育委員会
〒114−0022 東京都北区王子本町1−2−1
TEL. 03-3908-1111（代）
印　刷　文明堂印刷株式会社
刊行物登録番号 17−2−038